



<http://nssk.org/province/genpatsugroup/> (ホームページは日本聖公会管区事務所の諸委員会からリンク)

いのちの川

創刊号(2013年10月)

発刊に当たって

「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」がめざすもの

原発と放射能に関する特別問題プロジェクト
運営委員長 野村潔

日本聖公会の東日本大震災被災者支援活動「いっしょに歩こう！プロジェクト」は、さし当り2年間の働きを終え、「いっしょに歩こう！パートII」として、活動が継続されることになりました。一つは「だいに！東北」と名づけられた東北教区主体の活動で、主に福島県新地町での被災者支援を中心に行っています。

他方、原発と放射能汚染に関する課題については、日本聖公会として「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」を設置し、この問題に取り組むことになりました。

「いっしょに歩こう！プロジェクト」の活動方針に、私たちは、「原発事故とその影響について、深い関心を持ち、情報を収集・発信し、国内外に対し責任ある活動を行います」という項目を掲げました。しかし、過去2年間、実際はこの課題に関してきちんと取り組むことができませんでした。日本聖公会として、これから原発と放射能汚染によって苦しむ人々、また支援してくれた内外の人々に対して、長い時間をかけながら、責任ある働きを継続していかなければなりません。

先般のオリンピック招致運動の最終プレゼンテーションにおける安倍首相の演説と質疑応答を信じられない思いで聞かれた方は多いと思います。彼の発言は下記のようなものでした。「私が安全を保証する。状況はコントロールされている。東京には決して被害がありません」「汚染水は福島第一原発の0.3平方キロメートルの港湾内に完全にブロックされている」「福島近海でのモニタリング数値は、最大でもWHO(世界保健機関)の飲料水の水質ガイドラインの500分の1だ」「健康に対する問題はない。今までも、現在も、これからもない」。

福島第一原発3号機の爆発以来、私たちが恐れていたことが、次々と起こっています。あれから2年半が過ぎ、今も連日のように高濃度放射能汚染水による土壌や海洋汚染に関する新たな事態が報道されています。にもかかわらず、安倍首相何をもって「コントロール」していると言い得るのでしょうか。

汚染水については、東京電力は8月21日の記者会見で「放射能汚染水のタンクから高濃度汚染水が大量(3

00トン)に流出し、付近の排水溝を通じて外洋に流れたい可能性が大きい」と明らかにしました。東京電力でさえ認めている「外洋流出の可能性」を、何を根拠に「港湾内に完全にブロックされている」と言えるのでしょうか。

安倍首相と同様、招致委員会の竹田恒和理事長も「東京と福島は離れているので、想像するような危険性は東京にはまったくない」と語りました。そもそも東京の人たちが使用する電力を作るために福島に原発が建てられ、それによって被害を蒙っているのです。言わば東京の人々の生活のために犠牲になり、放射能汚染によって住む場所を奪われ、仕事を失い、人間関係を断たれ、夢や希望まで失いつつある人々に対して、こうした言葉がどのように響くのか、彼らは考えたことがあるのでしょうか。

日本聖公会の「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」の働きは、こうした原発事故による被災者、放射能汚染に恐怖と不安を抱えながら生活せざるを得ない人々の思い、とりわけ子どもたちの健康被害に不安を募らせる親たち、こうした人々の思いに寄り添っていきたいと考えています。

他方、ウソと隠蔽を重ねながら推進してきた日本の原発事業の実態について何が真実なのかということ、国内外に伝えて行く責任を感じています。殊に、汚染水の問題、海洋汚染、限りなく不可能に近い除染作業、そして被爆の実態など、原子力発電をめぐる問題の本質を教会全体、世界の聖公会全体に訴えて行く必要を感じています。それは、この深刻な過ちを二度と繰り返してはならないという思いと、原発に依存しない新しい生活の在り方、これまでとは異なる私たちの生き方を模索し、示すことが大切だと考えるからです。

そうした働きをお伝えするため「いのちの川」と名づけられたニュースレターを発刊しました。神様からいただいたいのちが大切にされ、川のように世界中の人々とつながっていくことを夢見ています。日本聖公会という小さな器が、とてつもない大きな課題に取り組もうとしています。しかもいつ終わるともしれない果てしない道のりです。ぜひ、被災したすべての方々のため、またこのプロジェクトの働きのためにお祈り、お支えいただければ幸いに存じます。

郵便振替口座 00120-0-78536

口座名 日本聖公会

「原発問題プロジェクトのため」と明記して下さい。

原発のない世界を求めて

原子力発電と放射能に対する日本聖公会の立場
日本聖公会第 59（定期）総会決議

東日本大震災における東京電力福島第一原子力発電所の事故は、周辺地域のみならず広範囲にわたって放射性物質を飛散させ、人々のいのちを脅かすとともに、原子力発電そのものが危険きわまりないものであるという事実を私たちに突きつけました。被爆体験を持ちながらも、これまで原子力発電と放射能の問題について十分な認識を持つことができなかった私たち一人ひとりにとって、それは神からの警告であるといっても過言ではありません。

しかしそもそも、原子力発電そのものが、燃料採掘の段階から廃棄物処理にいたるまで、弱い立場に追いやられている人々に犠牲を強いるものであり、たとえ発電所の事故がなくても、それは神から与えられたいのちを脅かすものであることは否定できません。また、人々の犠牲の上に成り立っているという点で、イエス・キリストの教えに反するものだと言うことができます。

にもかかわらず、「原子力の平和利用の名のもと、原子力発電所が日本各地に建設され、より多くの電力を消費することで、私たちは、快適で文化的な生活を享受してきました。しかし、東日本大震災は、原子力の平和利用を標榜した原子力発電の安全神話を粉々に打ち砕きました。今後は、原子力に依存するエネルギー政策の転換と、私たちのライフスタイルの転換が強く求められています。」（2012年3月11日主教会メッセージ）

日本聖公会は、その深刻な反省に立って、改めて、次のような点で原子力発電には重大な問題性があると考えます。

神によって造られたいのちを脅かす

福島第一原子力発電所事故は、生きとし生けるものすべてのいのちを脅かしています。とくに、子どもの放射能被曝は、将来の世代の健康を蝕んでいます。処理技術もないまま大量に生み出された放射性廃棄物は、長期にわたって人々のいのちにとって脅威になり続けます。しかも、日本のような世界有数の地震多発国における原子力発電所の存在は、将来にわたって事故を引き起こす危険性がきわめて高いものであるということは誰も否定できません。

さらに、海外のウラン鉱の採掘・精錬においても、先住民をはじめ労働に携わる人々を被曝させ、国内では原子力発電所の維持・管理にあたる原発労働者のいのちを危険に晒しています。また、原子力発電所から生み出される大量のプルトニウムは、直ちに核兵器の原料となりうるもので、原子力の平和利用と軍事目的とは表裏一体の関係にあります。また、戦争や紛争によって外部からの攻撃に晒された場合、危険性はきわめて大きなものとなります。

神によって創造された自然を破壊する

神は天地万物を創造され、最後に人間を創造されて、被造物すべてを保全する責任を委ねられました（創世記

第1章）。原子力発電は、神による委託の範囲を超えて自然を破壊する行為です。長い時間を経て安定した状態にされた放射性物質を発掘し、自然界には少量しか存在しないウラン235を濃縮して核分裂を起こすことによって巨大なエネルギーを引き出す原子力技術は、物質と自然の安定性を破壊し、重大な結果を引き起こしています。また、原子力発電は二酸化炭素を排出しないクリーンなエネルギーだとされてきましたが、実際には精錬の過程や維持管理において化石燃料を用いて大量の二酸化炭素を排出するのみならず、二次冷却水の温排水によって莫大な熱を環境に排出しているのです。

さらに原子力発電によって生み出された大量の廃棄物は、安全に処理することも保管することもできず、未処理のまま将来の世代に残されることとなります。それらの廃棄物の処理に対する責任は私たちにあります。私たち一人ひとりが、つくられたすべてのものを見て「良しとされた」神のもとに立ち帰らなければなりません。

神によって与えられた平和なくらしを奪う

原子力発電所は「絶対に安全だ」というふれこみのもとで、経済的疲弊を余儀なくされてきた地域に押し付けられてきました。それは雇用を創出し繁栄をもたらすと宣伝されてきましたが、実際には地域間格差を更に拡大しました。今回の事故によって周辺住民は住む家を失い、職場を失い、漁業や農業などの仕事も奪われ、生活基盤が確立できないために、子どものいのちを守るための避難もままなりません。さらに、広範囲の人々が、放射能汚染の脅威のために不安定な生活を余儀なくされ、精神的なストレスも深まっており、家庭崩壊さえもたらしめます。このような状況も私たちは深刻に受け止めていかなければなりません。

原発のない世界を求めて

このような点を踏まえて、日本聖公会において信仰生活を営む私たちは、まず、現在の事故において脅かされている人々、そしてこの地上のすべてのいのちを守るために祈り、イエス・キリストに従う者として公に発言すべきだと考えます。

なによりも、今回の原子力発電所事故がもたらした破壊的結果を、日本という国が責任をもって収束させるように求めるとともに、私たち一人ひとりがその責任を分かち合います。「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。」（マタイ第7章12節）というイエス・キリストの教えは、私たちが原子力発電所の危険性と放射能被曝を人口過疎地に押しついたり、原発を他国に輸出することによって、その地に新たな危険性を創出したりすることを許さないからです。

私たちは教派・宗教を超えて連帯し、原子力発電所そのものを直ちに撤廃し、国のエネルギー政策を代替エネルギーの利用技術を開発する方向に転換するように求めます。そのために、利便性、快適さを追い求めてきた私たち自身のライフスタイルを転換することを決意します。苦しみや困難を抱える人々と痛みを分かち合い、学び合い、愛し合い、支え合って生きる世界を目指します。

神がこの地を祝福し、地の平和を取り戻してくださいますように。

ニュースレターの名前、「いのちの川」について

ニュースレターの名前を決めるのに、プロジェクトのメンバーの中でさまざまな議論がありました。原発事故被災者の気持ちに寄り添えて、未来に対する希望のイメージを与えてくれる名前として何が良いかを話し合いました。福島の県花である『しゃくなげ』がよいという意見もありました。しかし、最終的には『いのちの川』という名前に決定しました。

「いのちの川」は、放射能に汚染された故郷の川、山、森、海が清められ、そのもとの生活を余儀なくされている皆さんの未来に希望が与えられるようにとの願いと祈りを象徴しています。聖書からは次の2箇所からイメージしています。
*エゼキエル書47：1-9…ここでは、神殿から湧き出る水が、水を、生き物を、すべてのものを生き返らせるということが語られています。このイメージは、私たちに希望を与えてくれます。

*ヨハネの黙示録22：1-2…ここでは天国の都の大通りの中央を流れる川が描かれており、その両岸には命の木があって毎月実をみのらせ、その木の葉は諸国の民の病を治す、と記されています。

聖書に描かれているイメージは、命の水の川です。わたしたちは、この川のイメージが、今も、そしてこれからも私たちに命と希望を与え続けてくれることを感謝して、ここから浮かぶ「いのちの川」という言葉を、私たちがともに歩むためのニュースレターの名前とさせて頂きたいと思えます。



研究・広報チームのご挨拶

原発と放射能に関する特別問題プロジェクトは、支援チームと研究・広報チームの二つの働きがあります。研究広報チームでは、原発問題に関わる調査とQ&Aの執筆、ニュースレターの内容の検討を行っています。支援チームとの二人三脚でプロジェクトを進め、さらに東北教区の「だいに・東北」とも連携をとって行きます。

原発事故被災者支援チームから

子どもたちのリフレッシュ・プログラム

福島の子どもたちは、土はさわらないで、草っぱは拾わないで、線量の高い木々のそばには近づかないで、と言われて過ごしています。幼稚園でもおもいきり園庭で遊ぶことができません。子どもたちにこのような状況を作ってしまったことを私たちは忘れてはなりません。

いっしょに歩こうプロジェクトでは、今夏も3つのプログラムを行ないました。①福島の幼稚園教師のリフレッシュプログラム-九州教区のご協力で北海道での全国保育者大会に参加。参加者から「福島の先生たちのお顔を見ていたら涙がでてきました」という声がありました。②山古志・福島ジョイントサマーキャンプ-中部教区のご協力で山古志と福島の子どもたちがキャンプをしました。同じように地震被害を体験した子どもたちが昨年は山古志で、今年は福島でいっしょに過ごすことができました。③長崎・南の島で夏休み-九州教区のご協力で、福島の幼稚園在園児、卒園児、保護者、おじいちゃんおばあちゃん13家族50名が長崎市から船で35分の「高島」という島でそれぞれ4泊から6泊で過ごしました。ここではきれいな貝殻を拾っても、お母さんは「よかったね」と言葉返すことができました。

いっしょに歩こうパートIIでは、子どもたち、幼稚園の先生、保護者たちのリフレッシュプログラムを活動の柱としています。

人体と放射能の関係はよくわかっていません。一度体の中に入った放射性物質は出て行かないと言われていましたが、チェルノブイリの子どもたちの1か月転地療養ボランティア活動を20年行っている野呂美加さんによって、体内の放射線量は低下し、子どもたちが見違えるほど元気になることが報告されています。また相馬市、南相馬市などの地方自治体とひらた中央病院、ときわ会常磐病院などの民間病院の活動により、「原発により福島は汚染されたがやり方次第では被爆も避け、従来通りの生活を続けられる」との報告もされています。子どもたちのリフレッシュプログラムのために、全ての教区のみなさまに引き続きご協力をお願い致します。それぞれ参加者の声はまた、みなさまにご紹介したいと思います。(献金先は、1ページに掲載)

今号では、紙面の都合で九州教区で行われた「長崎の南の島で夏休み in 高島」のみをご紹介します。次号以下で引き続き他の地方で行われたリフレッシュプログラムの様子をお送りしますので、ご期待ください。

「長崎の南の島で夏休み」

— 福島から高島へ —

九州教区 山本尚生

この夏、九州教区では7月29日から8月21日の間「長崎の南の島で夏休み in 高島」を企画し、郡山セントポール幼稚園の在園児、卒園児、その保護者、おじいちゃんおばあちゃんが長崎市から船で35分のところに浮かぶ「高島」にやってきました。

高島は軍艦島（端島）の目と鼻の先にあり、軍艦島と同じように炭鉱で栄えた島で、最盛期は18000人にもものぼる島民が生活していましたが、閉山と共に人口は減り、今では400人ほどが暮らす静



かな島です。長崎市からわずかしか離れてないにもかかわらず、島の海水浴場は「奇跡のビーチ」といわれ、泳いで珊瑚礁や熱帯魚が見えるところまで行けます。他にも島内には釣り公園、展望台など探検が出来るスポットもたくさんあります。そこに九州教区信徒が所有する元民宿があり、そこを何とか活用して子どもたちに夏休みを思いっきり過ごしてもらおうと企画されました。

今回高島に来たのは、13家族50名。こちらで日程を決めるのではなく家族の都合に合わせて滞在期間も決めてもらい長い家族で6泊、短い家族で4泊の滞在でした。プログラムも特に用意せず海に行きたい家族、散歩する家族、釣りをする家族、それぞれの気分や体調に合った過ごし方をしてもらいました。毎朝7時から釣りに行って、朝から夕方まで海水浴場で遊び、帰ってきてからまた釣り、と子どもたちにはいくら時間があっても足りないようで、帰る頃には肌が真っ黒に焼けて、まさに「島の子」になっていました。

食事は九州教区にサポーター募集を呼びかけて、約20名が入れ替わり立ち替わり島を訪れ、朝、昼、晩と自慢の料理を振る舞ってくれました。他にも釣り名人、虫取り名人、泳ぎの名人など各遊びの名人も駆けつけてくれて、今まで東北への思いがあってもなかなか現地に行けなかった九州のメンバーと郡山の家族が結ばれていい関係ができました。今度は九州から郡山に行く番のようです。

ある時、子どもが公園や海でひろってきた松ぼっくりや貝殻を見て「きれいだねえ」「よかったねえ」と言っていたお母さんが後から「今日は2年ぶりに心の底からよかったねえと言ってあげることができました」と語ってくれました。また、郡山に帰ってからあるお母さんがメールで「久しぶりに普通の生活が出来ました。触らないで、拾わないで、近づかないでと言われなくて子どもも満喫したと思います」と書いてありました。お母さんやお父さんたちのその言葉一つ一つに複雑な重みを感じました。

「去年の夏休みはどこにも行かずただ家の中にいました」これはセントポール幼稚園であるお母さんと立ち話をしていた時に出てきた会話です。親子で「ただ家の中にいました」を想像すればするほど、今回の「南の島で夏休み」を実現したいなあと強く思っていました。そして大きな事故怪我もなく無事に終わることが出来ました。この企画に共感して有機無農薬の野菜を提供してくれた農家のみなさん、天然酵母のパンをどっさり送ってくれたパン屋さん、静岡県沼津から子どもたちの安全の為、ライフジャケットを送ってくれた幼稚園の皆さん、いろんな方々の協力があり出来た高島プログラム、感謝しています。すでに来年への期待も膨らんでいます。

